

日風園

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉

第122号

令和6年(2024)7月1日

資料見聞

夜の田植え

―北川村和田―

当館の調査対象は、形ある物とは限りません。祭りや芸能や民謡のような無形民俗文化財は、民具のように実物を集めて保管するわけにはいきません。そこで、写真や動画で記録して、紹介することになります。

今回紹介するのは、北川村和田で星神社の秋祭りに行われる「夜の田植え」です。

この行事を発見したのは、写真家の藤田茂男さんです。平成29年(2017)当館のフリースペースで展示された「北川村の今を伝えた い」で紹介され、こんな珍しい行事があるんだとビックリしました。

行事は単純です。秋祭り前日の宵、祭典が終わると氏子たちが神社の後ろに行き、東西の榊

の木の前を東の田、西の田に見立て(写真1)、折った木の枝を挿して田植えの真似をします。その時の唱え言がユニークです。

「ひょんひょんひょろくだ、マキの谷のうーどうど」

などと口々に唱えながら小枝を挿し、豊年満作を祈ります(写真2)。

さらに翌日には「加地子」の行事があります。祭典や御神幸の後、小作人役の和田地区の総代が、田の持ち主役の小島地区の総代に加地子(年貢)を納める様子をユーモラスに演じます。和田の枡から小島の枡へ米を移す時、今年是不作だったと言い訳したり、回数をごまかしたりして笑いを誘います(写真3)。



写真1 東の田に見立てた木の前で祈る宮司。星神社は和田と小島の氏神である。



写真3 加地子の行事。左が和田で右が小島。



写真2 村人が不思議な唱え言を言いながら、木の前に小枝を植える。

令和5年(2023)10月に念願の行事を見ることができました。県内に類例は確認されておらず、おそらく大変古風な行事です。まだまだ県内に知られざる文化が残っていることに興奮しながら、北川村を後にしました。

(梅野)

企画展

秘められた神と祭り — 高知県の不思議をたずねて —

会期・令和6年7月19日(金)～9月23日(月・振休)

梅野 光興

■知られざる祭りをテーマに

企画展「秘められた神と祭り」では、高知県内の神秘的な祭りや謎の多い不思議な祭りを取り上げます(写真1)。興味深いテーマですが、実は学芸員にとっては難しいテーマでもあります。まず、普通の祭りと違って、神秘的な祭りは展示資料としてはとても地味です。見せる祭りではないので、派手できれいな作り物が無いのです。真夜中の祭りという想像力を刺激されませんが、屋外の儀式などは撮影するのに一



写真1 当人子(室戸市椎名)米を入れた俵(おみこく)の前に4人の男の子が座る。うとうとすると神が憑いた、という。

苦勞。祭りによっては撮影禁止、取材NGという所もあります。供物には特殊な物がありますが、食べ物だけに、借りてきて展示するわけにもいきません。今回のテーマは正直に言えば博物館向きではないのです。

ですが、それでもあえてテーマに選んだのは、このような祭りが令和の高知県でいまだに行われていることを知っていたからです。高知県には、まだまだ知られざる興味深い民俗があるので。しかも意外に身近な所に。

それでは、高知県の不思議な世界に行ってみましょう！

■「起こし太鼓」との出会い

変わった行事があるなあ、と私が最初に意識したのは、平成22年(2010)11月、館のすぐ近くの氏神様、別宮八幡宮(南国市岡豊町)の祭りでした。メインのおなばれ(御神幸)ではなく「起こし太鼓」という行事です。早朝5時から二人の男性が軽トラに太鼓を乗せて氏子の集落を巡り、太鼓を叩いて回ります。「今日は祭りだとい

うことを触れて回る」そうですが、私はこれまでそのような行事を見たことも聞いたこともありませんでした。資料館の目と鼻の先にこんな行事があることに驚きました。

■不思議な「お樽」行事

それから7年後の平成29年(2017)、高知市春野町東諸木でも変わった行事に出会いました。高知市文化財保護審議会の委員として東諸木八幡宮の秋祭りを調査することになったのです。本祭のおなばれがメインですが、前日にも「お樽」という行事があるというので見に行きました。

「お樽」は文字通り木製の樽で、中に酒を入れてあります。夕方、当屋と



写真2 お樽行事(高知市春野町東諸木)酒入りの樽を担いで村の中を回る。

いう当番の家に若者が集まって飲み食いした後、「お樽」を担いで暗くなった地区を回ります。最後は神社に運んで行くというので、供物のお酒を運ぶ儀式なのかな、と思いつながら付いて行きました。

ところが驚いたことに若者達は道の途中や家の前でお樽を激しく地面に叩きつけ始めました(写真2)。樽が壊れ、中からお酒が染み出します。これでは神社に着く頃にはお酒が無くなってしまいます。「ええっ?」と思いましたが、これが「お樽」の作法なのだそう。しかも、記録には「お樽」の別名を「お神楽」と書いてあります。どうやら「お樽」は単に供物を運ぶだけの行事ではなさそうです。頭の中で謎がぐるぐる渦巻きます。それとともに、高知市内にこんな奇祭があることにびっくりしました。

■つながる二つの行事

令和元年(2019)から高知県が大々的な民俗芸能調査を行うことになり、私も委員の一人に委嘱されました。調査対象を考える時に気になったのが9年前に見た「起こし太鼓」です。同様の風習が県内にどう広がっているのか、これまで調べた人も考えた人もいなかったのです。チャンスだと思い、アンケートの項目に入れてもらいました。

その結果はと言えば、「起こし太鼓」は南国市と香美市の限られた地域に分布する習俗でした。名前も「起こし太鼓」以外に「ふれ太鼓」という所もあります。私も2ヶ所だけ見に行きました。

その内の1ヶ所が南国市の金地です。ここでは「起こし太鼓」は夜から朝にかけての行事でした（今では夜半に終了）。神奈地祇神社の秋祭りの前日、当屋に人々が集まって飲み食いした後、太鼓を軽トラに積んで氏子の家々を巡ります。家の前で太鼓を叩くと家の人が出て来てお酒などを一行に渡しませす。太鼓の一行はお返しに御神酒や生臭（スルメ）を家の人に口にしてもらいます。

金地の行事を見ている内に、岡豊の「起こし太鼓」と東諸木の「お樽」が頭の中でつながってきました。

夕方、当屋に集まってから集落を回る所は「お樽」、太鼓を叩いて回るのは岡豊の「起こし太鼓」です。別だと思っていた二つの行事が、金地の「起こし太鼓」をはさむことで、関連が浮かび上がってきたのです。

バラバラだった断片が結びつきあって、ひとつのイメージが浮かび上がる瞬間。これぞまさに調査研究の醍醐味です。

■土佐の秘められた祭り

「起こし太鼓」はこれまであまり研究されていませんでしたが、「お樽」については民俗学者の高木啓夫先生が重要な指摘をされました。それは、「お樽」は中土佐町久礼の「おみこくさん」と同じ種類の祭りだということです（写真3）。



写真3 おみこくさん（中土佐町久礼）
「おみこくさん」とは神聖な飯と餅のこと。大松明の先導で神社へ運ぶ。

高木先生の『土佐の祭り』（高知市民図書館）や、先生が中心になってまとめた『高知県の祭り・行事』（高知県教育委員会）、そして井出幸男先生の研究をひもといていくと「起こし太鼓」や「お樽」は、先学が調査研究を積み重ねてきた祭り行事と緊密に結びついていることがわかってきました。先学の研究に導かれながら土佐の祭りを訪ねました。今回の企画展では、その成果をもとに、県内の神秘的で謎の多い祭りを紹介します。くわしくは展

示で明らかにしたいと思いますが、その特徴を少しふれておきます。

・限られたメンバーだけが、身を清めて供物を作る。
・供物は、餅や煮し飯など米を調理したものが多い。杓形餅や手形・足形餅など特殊な形の餅を作る所もある。

・供物を作る時間が真夜中だったり、供える時間が午前0時だったり、供物を夜中に運んだり、準備や儀式が深夜に行われるなど、夜の行事が多い（写真4）。

・餅や御飯、酒などの供物を、当屋から神社へ運ぶことが、「お樽」のように儀式化したり、久礼の「おみこくさん」のように盛大になる場合がある。

・当屋に、オハケという標示物の竹と御幣の飾りを立てる所が多く、ギョウジ・イタジヨウと呼ばれる男児・女児が出る所もある（写真5）。ギョウジは、江戸時代には



写真4 烏食い神事（香南市香我美町徳王子）真夜中に「八咫烏の神よー」と熊野の烏を呼び寄せる。



写真5 ギョウジとイタジヨウ（須崎市鳴無）地面に足をつけてはならないとされ、おんぶや肩車で神社に連れて行く。

神が憑依すると考えられていた。オハケやギョウジ・イタジヨウは神の依り代とも考えられており、今では実際に神がかりするわけではありませんが、スピリチュアルな要素が見られます。

重要な特徴は、今回取りあげる祭りの多くが古くから開発された平野部の行事だということです。高知県ではこれまで山や海の民俗が重視されてきましたが、今回の調査で、平野農村部の精神世界の一端が浮かび上がってきたように思います。

■天井裏の神々と仮面

企画展の後半では、香美市物部町の民間信仰「いざなぎ流」を取り上げます。当館では、平成9年（1997）の「い



写真6 川に流された仮面
(香美市物部町)
流れてきたのを拾ったと言う。

ざなぎ流の宇宙」、平成28年(2016)の「いざなぎ流の里・物部」と2回企画展で取り上げ、常設展示でも「神と妖怪」コーナーで紹介されています。

いざなぎ流にも「秘められた神」の信仰があります。

家の天井裏のふだん人目につかない所に天の神、オンザキ様、ミコ神様などの高神(あら高い神)を祀っているのです。四つ足の肉を食べた者はけがれているとされ、家族は肉食禁止、けがれある者は、神を祭る「人らずの間」には足を踏み入れることも許されません。祭日は年に一度、祭りに携わるのは家の主人だけで、朝からみそぎをして身を清め、供物を天井裏に供えます。あまり秘密にしているのが、隠れキリシタンではないか、と言う人もいます。天井裏には仮面を祀る家もあります。物部では、仮面はただの道具ではなく、それ自体が神様と考えられています。箱に入れる順番が間違っているとひとりでに飛び出すなどと言われ、その威力は恐れられていました(写真6)。

いざなぎ流の裏の呪術

いざなぎ流には、さまざまな呪術が伝えられています。その中でも表に出してはいけない「裏の呪術」が呪い調伏です。

神霊に頼み事をする時は、供物を並べ、神々が喜ぶ文句を唱え、自分の願いを訴えるのが基本ですが、人間に取り憑いて病気をもたらす悪霊の中にはなかなか言うことをきかない者もいます。

そんな時は呪術の出番です。「法文」と呼ばれる呪文を唱え、手で印を結んで、強制的に悪霊を追い払うのです。その時に不動明王など密教の仏や、陰陽道の式神に由来する式王子という神霊を使役して、出て行かないならお前をやっつけてしまおうぞ、と荒々しい口調で迫るのです。悪霊は式王子らの力で強制排除されると考えられています。

ここまでは、「表」ですが、それを人間に対し悪意をもって使うと「裏」の呪術、すなわち「呪い」になります。いざなぎ流の太夫たちは、呪いはやっではないけないうことで、昔はそんなこともあったようだが、最近はそんなことはないと言います。「裏」の呪術が書かれた書物は見せないようにしている太夫も多いです。

しかしながら、呪いは「呪詛」と呼

ばれ、平安時代の昔から盛んに行われていました。今年の大河ドラマ「光る君へ」にも呪詛の様子が描かれましたが、その文句は、いざなぎ流を参考にしていると一部で話題になりました。

いざなぎ流が、形こそ異なっているとは言え、古代の呪詛信仰を伝えているのはかなり凄いことです。展示では、いざなぎ流の呪術を紹介するとともに、天井裏の神々の謎も考えてみたいと思います(写真7)。



写真7 いざなぎ流日月祭の湯立て(香美市物部町) 月の出を拝むいざなぎ流最大の祭り。

県立文学館・県立美術館とのコラボでもっと不思議な世界を!

「秘められた神と祭り」展は、高知県立文学館の企画展「創刊45周年記念 ムー展」謎と不思議に挑む夏」と、高知県立美術館夏の定期上映会「MUな映画」とコラボします。文学館・美術館と相互割引を行い、陰陽道・いざなぎ流研究者の斎藤英喜先生(佛教大学教授)が、8月3日(土)は当館で講演会を、8月4日(日)は文学館主催のムー三上編集長のトークに飛び入り対談で参加します。

スーパード・ミステリー・マガジン『ムー』は、UFO・未確認生物・超能力・古代文明・心霊現象・終末

高知県の祭りの秘められた部分を解きほぐす作業は、高知県の歴史や文化の奥底をのぞくようなスリリングな体験です。ぜひあなたも、知られざる神々の祭りにふれてみてください。

予言など世界の謎と不思議をテーマにした月刊誌で、陰陽道やいざなぎ流、日本の民間信仰も取りあげています。美術館の上映会では「海底軍艦」「卓弥呼」など『ムー』の世界に通じる映画を上映。当館の企画展とあわせて見ることで、あなたの不思議世界が拡張するのは必至です! 高知県文化財団の3館コラボ企画、ぜひあわせてご覧ください。

また、いざなぎ流については、当館も協力した企画展「いざなぎ流のかみ・かたち」が横浜人形の家(神奈川県)で7月21日(日)まで開催中。来年令和7年1月3日(金)には県立美術館で、いざなぎ流保存会による公演が予定されています。

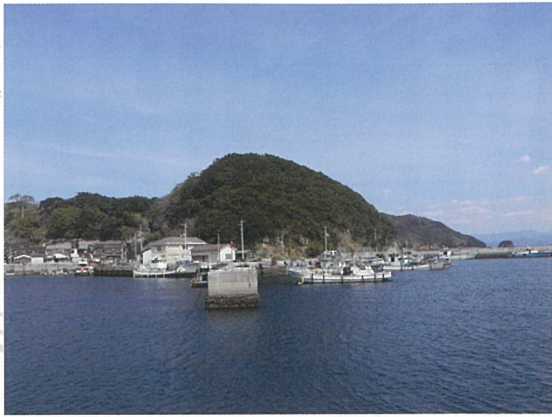
「西南四国の中世社会と公家」企画展調査から

戸島見聞記

副館長 松田 直則

宇和島市戸島

令和7年2月から始まる企画展「西南四国の中世社会と公家」の調査のため、曾我学芸員と宇和島市の戸島に行ってきました。天正3年(1575)の四万十川(渡川)合戦で敗れた一条兼定が幡多から追放され、晩年を過ごした宇和海の小島です。



戸島の本浦集落と城跡

法華津氏と戸島

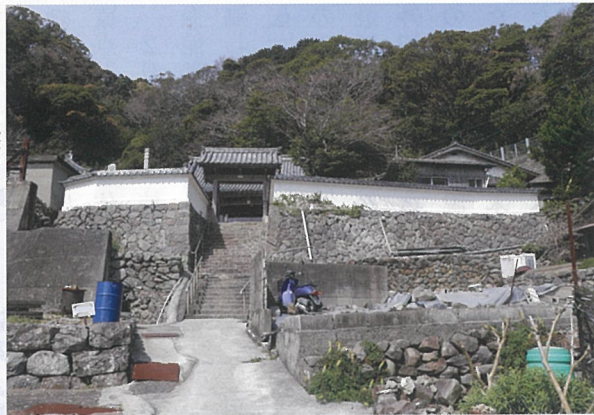
宇和島市からのフェリーが戸島に着すると、本浦漁村集落の裏山にある城跡が見えてきます。現在でも、主郭の平坦部や堀切が残っている小規模な

城跡で、この地域を支配していた法華津氏の支配下にいる者が海城としての機能を持たせるため構築したと考えられます。法華津氏は、一条氏との関係も深く、中村や宿毛に所領も与えられており、四万十川合戦にも一条方として参陣しています。法華津地域は西園寺家勢力圏ですが、法華津範延は天正4年(1576)に戸島に隣接する日振島衆へ掟書を出していて、この島嶼部も含め豊後水道の拠点を掌握しています。

龍集寺と兼定墓所

戸島の本浦集落奥の山際に龍集寺があります。龍集寺は浄土宗の寺院で、本尊は阿弥陀如来です。「宇和旧記」には、「開山不知、大超寺末也」と記載されているようです。この境内の一角に、幡多から追放されて終の住処となり戸島で亡くなった兼定の墓所があります。覆屋の中には、形の崩れた宝篋印塔の一部がまつられています。九州の阿蘇火砕流が冷えた溶結凝灰岩で、大友氏との関係で豊後の石材が用いられたと考えられます。家臣50・60人を従え戸島に居を構えたとされています。

ますが、島民からは「一条様」や「宮様」と呼ばれ慕われたと伝えられ、現在でも大切に島民によって墓所が守られています。



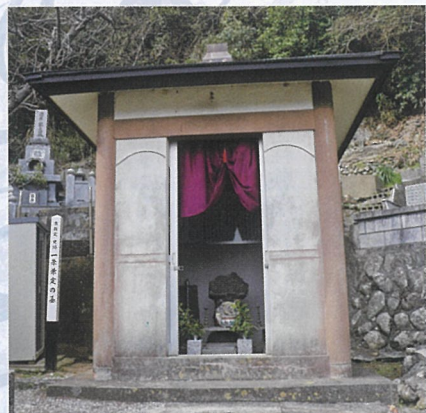
龍集寺

兼定と内政

兼定の嫡男で、大津御所にいた内政が長宗我部元親から追放されたのが天正9年(1581)頃です。内政も、船で伊予国の法華津に送られており、法華津氏が関係していると考えられますが具体的な追放場所は不明です。その時、父親の兼定と会えたかどうかわかりませんが、兼定が病気で亡くなったのは元親が秀吉に降伏した天正13年(1585)で、この数ヶ月後には内政も亡くなっています。

元親の降伏と兼定・内政の死が偶然

にも同じ年であることが戦国時代の終焉とともに気になるところです。



一条兼定墓所

歴史の詰まった魅力的な島

龍集寺には、「土佐一条家五代像」の掛軸が保管されています。比較的新しい時代に描かれています。その年代は不明です。この五代像を調査し、借用の依頼を行う目的で龍集寺に向きました。境内の墓地には江戸時代の戸島庄屋である田中家の石塔群もあり、墓石の変遷を見ることができると、小さい島ですが歴史の詰まった魅力的な島です。

平成21年は、兼定没後四二五回忌に当たり法要が行われましたが、高知・愛媛の予土歴史文化研究会のメンバーも参列しています。西南四国の戦国時代の歴史を紡いだ一条兼定をまつり、今なお兼定の墓前には香華が絶えず、毎年の命日には盛大な法要が行われているとのこと。

企画展「タイムトリップ土佐 ― 絵図・絵葉書・写真 ―」に 展示した「田辺寿男の民俗写真」について

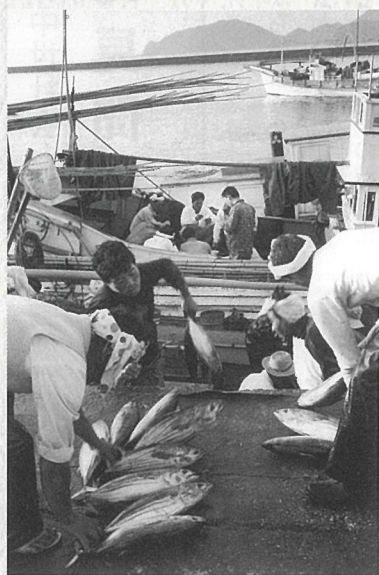
中村 淳子

今春の企画展「タイムトリップ土佐」に、田辺寿男氏（1921―2010）の民俗写真を展示しました。

民俗調査に裏打ちされたその写真は昭和から平成にかけての貴重な記録であり、同展の一翼を担うのに似つかわしいものでした。

写真をめぐる状況は、同氏が撮っていた頃とは大きく変わりました。フィルムから電子媒体へ、一眼レフカメラからスマホ等へと変化するにつれて、撮影する機会やカット数は大幅に増えていきました。その点にも、タイムトリップ感があります。

とはいえ、同氏は白黒ネガフィルムで2万6千本以上の膨大な写真を撮っています。しかし、やみくもに撮っている訳ではなく、「人の心の奥底を見つめたい（中略）、心象的なものがなかったら、撮りません」（『岡豊風日』24号）と語っています。



カツオの水揚げ

昭和59年（1984）土佐市宇佐

展示の解説文では、「背景に写り込んだ道具や船も時代の移り変わりを物語る」と、写真の特徴の一端にふれた。

だからこそ、シャッターを切ったときの同氏の感動が伝わる魅力的な写真が、たくさん遺されたのでしょうか。高知県の暮らしの一コマ一コマが焼き付いた写真は、県民の「心の財産」です。当館では、同氏の個展を5回開催してきましたが、今回は企画展の一コーナーに展示するという新しい試みでした。

そのため一層、写真とは何か、田辺氏の写真の特色とは何かと考えざるを得ませんでした。解説文も、被写体の説明を主体としたこれまでとは趣を変え、同氏の視点や撮影の方法論を推し量って盛り込みました。これによって、ブレてもお構いなしに腹で撮り、ブレずに土佐の民俗を見据えた同氏の姿勢が浮き彫りになったように思います。

着任のご挨拶

学芸課長 亀尾 美香

この春、学芸課長を拝命しました。

博物館で働き始めて23年、歴史館が3つめの職場となります。最初に勤めた東京の八王子市郷土資料館（当時）は非常勤での採用で、古文書担当として資料整理をするのが主な仕事でした。

歴史館と同様、歴史のほか考古や民俗など幅広い資料を数多く収蔵しており、地域に根ざして資料を収集、保存してゆくことの重要性を肌で感じることができました。私にとって学芸員人生の原点ともいえる体験ができた館でした。

2011年、桂浜の県立坂本龍馬記念館に常勤学芸員として採用され、帰郷しました。NHK大河ドラマ「龍馬

伝」放映の翌年で、まだ年間22万人も最初の館と全く異なり、毎日多くの県外観光客が訪れる館で、仕事も企画展の開催や展示解説などが主となりました。

もともと幕末の政治史が専門だったため、ここでは学生時代からの学びを十二分に活かして仕事をすることができました。また、新館建設・本館リニューアルに携わるという、貴重な経験を在職中に得ることができました。

博物館で仕事をするなかで、研究や教育普及などと異なり、博物館に常駐する学芸員にしかできない仕事があると思うようになりました。それが、資料の収集と保存です。この世に一点しかないオリジナルの資料には、数百年を生き抜いてきたその資料にしか語れない「真実」があります。私自身、幾度そうした資料に出会って感動を得、励まされてきたかわかりません。歴史の荒波をくぐり抜け、今もここにある資料を、一点でも多く、少しでも良い状態で次の世代へ引き継ぐ。それこそが博物館と学芸員に与えられた最も重要な使命だと考えています。

歴史館は今、収蔵庫問題をめぐって大きな岐路に立たされています。学生時代、帰省のたびに展示を見に訪れた思い出のある館に、このタイミング、この立場で携わることとなり、ご縁を感じるとともに少なからず不安もあります。微力ではありますが、これまで得た知識や経験が、少しでも歴史館やふるさと高知の歴史資料のよりよい未来の実現に役立てば無上の幸せです。歴史館の今後にご期待いただくとともに、温かい応援を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。



第19回 岡豊山フォトコンテスト 作品募集のお知らせ

「岡豊山の春夏秋冬」をテーマに、岡豊山の写真を大募集！ 最優秀賞、優秀賞、スマホ大賞に加え、各種特別賞を選びます。応募作品は館内で展示（11月23日（土・祝）～令和7年1月26日（日）予定）するとともに、応募作品の一部を掲載したオリジナルカレンダーも作成する予定です。

写真撮影が好きな方、これから写真を撮ってみたいと思っている方、カメラ片手に季節の訪れを感じる岡豊山へ足を運んでみませんか。

たくさんのご応募をお待ちしております。

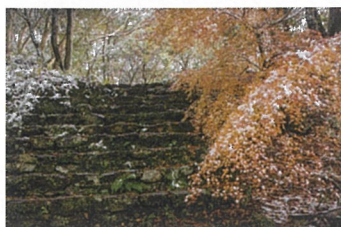
- 募集期間：7月2日（火）～10月31日（木）17時迄
 - 募集内容：岡豊山で撮影した・岡豊山を撮影した写真で未発表の作品（一般部門：1人1点、ケータイ・スマホ部門：1人2点まで）
 - 応募方法：高知県立歴史民俗資料館に持参または郵送いただくか、HP・QRコードのメールフォームからご応募ください。
- ※詳細は、HP、チラシ等でご確認ください。
（総務事業課）



▲ケータイ・スマホ部門
申込用QRコード



▲「秋日和」島元慶子（第18回最優秀賞）



▲「初雪」太田和子（第18回優秀賞）



▲「秋よ来い」小柳由紀
（第18回スマホ大賞）



▲「若さ、はじける！」鳥原弘子（第18回優秀賞）

レポート

岡豊城跡、世界の青年の交流の場に

総務事業課

内閣府が主催する「令和5年度世界青年の船」事業の「地域実践活動」の場として高知県が選ばれ、2月10～17日の8日間、日本と世界13か国の青年が高知県に集い、ディスカッションや文化交流等が行われました。そのうち、2月11日（日・祝）には「地域の人が誇りを感じるまちづくり」地域の歴史と伝統の継承をテーマにしたグループの研修先として、当館及び岡豊城跡での活動を受け入れました。

高知県プログラム実行委員会スタッフがとは事前にも何度も打ち合わせ、城跡を歩き、「ここが攻守のポイント」「甲冑に旗指物があると合戦の雰囲気ができる」など、楽しんで研修してもらえよう知恵を絞り、ボランティアスタッフがフにも事前に甲冑の着けかたのレクチャーを行いました。

当日参加した青年は21名、スタッフを合わせて53名が2班に分かれての研修となりました。甲冑を身



に着けて城攻め体験をするプログラムでは、「戦のこと、城のこと、歴史のこと、本当に多くのことを学べた。甲冑を着るのは初めてで刺激的な経験ができた」など、見学だけでは味わえないことを「体感」してもらうことができました。ガイドと城跡をまわるプログラムでは、「山の様々な特徴を生かして城を守る先人たちの知恵に感心した。日本人の生活と自然とのつながりを強く感じた」など山城ならではの構造と歴史を学んでいただきました。また、これらを語り継ぐ地元ガイド・通訳とのコミュニケーションも有意義なものになったと思われまます。



れきみん! サマーミュージアム ～フシギな世界へようこそ～

7月26日(金)、8月11日(日・祝)、8月24日(土)

今年は企画展にちなんでフシギをテーマにワークショップやイベントを開催します。

■主なプログラム/メニュー

- クイズラリー、駄菓子屋さん
- ミュージアムトーク、バックヤードツアー★
- ステンドオイルづくり、牛乳パックでビックリ箱づくり、仮面づくり★、缶バッジづくり、竹水鉄砲づくり★、いざなぎ流御幣切り体験★、守り神づくり★、フシギなボトルづくり、おはなし本づくり ★は要予約
- ジェラート販売

※開催日時など詳細はHP、チラシ等をご覧ください。



民家で囲炉裏の火焚き

7月21日(日)、8月18日(日)、9月15日(日)

岡豊山歴史公園に移築した茅葺屋根の山村民家で、毎月第3日曜日9時半からお昼前まで、いろいろに火をいれます。ご参加お待ちしております。



土佐のまほろば ウォーク2024 ～歴史にどっぷり～



●10月13日(日)「山城にどっぷり!①」

岡豊城跡、瑞応寺跡など

●11月19日(火)「山城にどっぷり!②」

布師田金山城など

8月1日(木)9時より受付を開始、詳細は当館HPをご覧ください。

企画展 秘められた神と祭り

～高知県の不思議をたずねて～

7月19日(金)～9月23日(月・振休)

高知県内の神秘的な祭り、不思議な祭り、謎が多い祭り、スピリチュアルな祭りと神々を、写真や祭具によって紹介します。



企画展関連催し

●講演会 「陰陽師からいざなぎ流へ
～異貌の日本宗教史～」

8月3日(土) 14:00～16:00 先着100名

講師：斎藤英喜氏 (佛教大学教授)

●四国民俗学会シンポジウム「四国の神ごと」

9月16日(月・祝) 13:30～16:30 先着100名

●講座

①「高知県の不思議な祭りをたずねて」 7月28日(日)

②「いざなぎ流の秘められた神々」 9月1日(日)

講師：梅野光興 (当館学芸員)

いずれも14:00～16:00 先着各回100名

●ワクワクワーク

「いざなぎ流御幣切り体験」 講師：森安正芳氏 (いざなぎ流太夫)

8月11日(日・祝) 10:00～12:00 定員25名

●ミュージアムトーク

①7月20日(土)、②8月11日(日・祝)、③8月24日(土)

各回14:00～14:30

※ミュージアムトーク以外は要事前予約

今年の夏は3館コラボで謎と不思議を深めよう!

①高知県立文学館 企画展「創刊45周年記念
ムー展 ～謎と不思議に挑む夏～」

7月6日(土)～9月16日(月・祝)

※歴史と文学館のクロスイベント

「三上編集長トーク+斎藤英喜先生飛び入り対談」

8月4日(日) (申込締切7月8日)

②高知県立美術館 夏の定期上映会「MUな映画」

8月24日(土)・25日(日)

①の半券か、②のチケットか半券提示で「秘められた神と祭り」展を団体料金で、「秘められた神と祭り」の半券提示で、①は団体料金、②は前売料金でご覧になれます。



文学館QRコード



美術館QRコード

予告

次回企画展

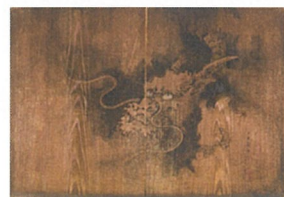
3館連携企画 生誕200年

河田小龍

～土佐の人々とのつながり～

11月1日(金)～令和7年1月5日(日)

幕末維新期の土佐を代表する絵師・河田小龍の生誕200年を記念して、県立美術館、県立坂本龍馬記念館と連携して開催します。3館がマルチ絵師・小龍の異なる横顔を取り上げますが、当館では、掛軸、衝立、屏風、襖絵など生活を彩る絵画や、信仰や願いを込めた絵馬など、人々の暮らしと関連して生み出された美術作品を紹介します。



河田小龍筆《龍虎図衝立(龍図部分)》高知県国清寺所蔵

岡豊風日(おこうふうじつ) 第122号
令和6年(2024)7月1日
編集・発行 (公財)高知県文化財団
高知県立歴史民俗資料館
〒783-0044 南国市岡豊町八幡1099-11
TEL 0888(8662)2211
FAX 088(862)2110

開館時間 午前9時～午後5時
休館日 年末年始12月27日～1月1日
臨時休館することがあります

観覧料 (通常展) 大人(18才以上) 470円
団体(20名以上) 370円
(企画展 常設展示込み) 520円
団体(20名以上) 420円

無料：高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者、身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(一名)

印刷：川北印刷株式会社

https://www.kochi-rekimin.jp
Eメール：rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp